

C-27 小袖についての一考察
—単衣の衿について—

名古屋市立女短大 木野内清子

1. 近世以降の代表的衣服である小袖について、形態、構成を中心に調査し、現代の衣服への流れを考察して、その認識を深めたい。

今回は、単衣の衿および掛衿について考察してみた。

2. 服装に関する各文献、風俗版画、および博物館展示物を資料とした。

3. 文献によれば、江戸時代の単衣の衿は上、下着ともに衿仕立とあるが、それは即ち現在行なわれている広衿仕立であり、調査した実物単衣も同じく、その衿仕立であった。

又、江戸後期にはその社会状況から、浴衣の衿に絹裏の付いた例もみられる。

又、掛衿については、「礼服、晴着以外に共布、黄布等の掛衿が、衿の保護と装飾をかねて、表着の上に、あるいは裏衿がわりに用いられた(半衿および長衿)」とある文献の記述は、衿、綿入れが主であるが、単衣もこれに準じたものと思われる。単衣の掛衿については「江戸の娘が帷子、浴衣に緋や紫の無地、絞りの縮緬を衿の表にかけている」とあり、又、江戸時代の裁縫書の小袖の裁方にも、半衿付の図がみられるので、単衣にも、共衿がかけられたものと思う。

現在の共衿付単衣は、明治以後、大方の着用をみるに至った。